

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020. 4



令和2年4月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第4号

No.743

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もつと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下して北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二〇年 四月号 (通巻七四三号)

◇今月の二十首誌……平成を生きる 松本多摩子 2

■作品 [A] 市原志郎・市原やよひ他 4

A 渡辺徳子他 22

B 和田健二他 54

C 江尻リエ子他 68

A 鈴木剛之他 82

■オリープ集 杉原令子・鈴木文子他 44

◇今月の二人 吉田明子・土井谷恭子 18

香川進の生きものの歌 18 田土成彦 14

宮柗二と香川進 (続の続) 久我田鶴子 15

私と短歌との出会い (212) 中山真弓 21

◆《特集》写真・歌合わせ [責任編集] 田土成彦 39

石塚貴美恵・村上 旭・安部 律

横田美穂子・藤川淳子ほか

◇シルクロード・カフェ [責任編集] 木村文子 50

■歌壇月旦 歌の「場」——歌会始—— 西堤啓子 73

■遊覧寄港 〈短歌に助けられて〉 森ヒロノ 67

第一歌集の頃 虎谷信子・福田庸子 52

両角徳子・坂口正子

■二月号作品批評 74

A……小野雅子・光広祥子

三浦好博・松本多摩子

B……岩里周英・藤田しん子

C……篠原まり子

オリープ集……養学登志子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 20

最近の歌誌より [編集部] 99

福島発・風のとより 石井悠子 66

第68回地中海全国大会 (浜松大会) 案内 100

神田通信……表3

(表紙デザイン) Grandy Xyga

平成を生きる

松本多摩子

夫の逝き孫の生れたる三十年悲喜こもごもの平成終る

紋白蝶つかず離れず草を取るわれとしばらく遊んでゆけり

天気図をま青にそめて雨は降り悲惨な爪痕残して止みぬ

この暑さ災害と呼ぶ厳しさに負けてしまいぬ今年のわれは

二人子の盆に揃いてとる写真亡夫の遺影も入れて十人

二階まで母担ぎあげはらからの盆に集えり海見える店に

秋雨のひとひ降りつぐ寒き日は河野裕子の“あなた”を読みぬ

短歌にはならねどわれの歌づくり夫亡きあとの生きたる証

昭和十八年生まれ。
桜の会所属。

麦の穂の出揃う畦道春うらら彼岸の留守を詫びて墓参に

暑いから蚊がいるからと放置せし伸びた庭草取りて二時間

里訪えば父母の日常ここにあり草の繁れる畑や墓に

消えかかる母の命を記憶にと書きし日記をまた読みかえす

まっ白な富士と孫とが写りたる寒さ増す朝息子あせよりのライン

今朝の冷え散歩に出かける身仕度に手間どり友を待たせてしまいぬ

出身の国は違えどワンチーム君が代誰もが高らかにうたう

大会の後の観光友と来てアベノハルカス風こちよし

朝晩に亡夫に語りて四半世紀声も姿も遠くになりぬ

大阪はまだ慣れません人ごみの波に押されて田舎育ちは

九月の蚊油断していし後悔の眠りをさます憎き一刺し

正座してウルトラマンを見る孫は日本男児よ足裏のいとし

作品 A

市原 志郎

テレビの中

・萬

大 浪 美 雪

枯草色

・森

鳥二羽の影が横切る窓ガラス今日は冬の真中なんだ
 久し振りにコーヒー飲みに車椅子押ししてもらいつつ林の中まで
 世の中に広がって行く病のこと怪しやテレビの中のみなれど
 収まらぬ新型肺炎のニュースのこと見ているベッドの中にて
 テレビのみ外との繋がりある日日はいつの間にも冬過ぎて行くなり
 鬼は外福は内孫の声我のまわりにありて夜は更け行く
 我が誕生日いよいよ間近くなりけりよくぞ生き来し昭和平成

市原 やよひ

鬼やらい

・萬

奥 田 陽 子

冬 日

・羊

公園に入りたくない夫乗せて車椅子に行く公園通り
 公園に響く明るき声避けて遠まわりする車椅子なり
 冬暗れの続く日日なり新型のコロナウイルスのニュースに埋まる
 増え行ける肺炎伝えているテレビ人の絶えたる武漢も映す
 鬼やらい今年は寂し孫一人我ら二人の縮小版なり
 窓に触れ又離れ行く冬の枝真青な空をキャンパスにして
 カレンダー二月雪降る絵になれど雪は降らざり光あふるる

無人駅の名所案内隠せるは高く繁りたる椿ひともと
 「九重」とはゆかしき地名早咲きの桜開きぬ匂うばかりに
 寒中の牧場に牛の姿なく枯草色の芝に覆わる
 風花の舞い舞うなかに聞きたるはひばりのさえずり寒くはなきか
 地蔵尊の頭にとまり尉じょうひたも 鵝胸をそらして拝礼を受く
 竹藪のうす暗きなかに冬の陽の低く射し入りほっこりあかし
 夕空に筆をふるうは誰なるか墨色の雲オレンジの筋

大風の来るとう朝鳥の群かたまりて黒く空をわたれる
 冬日射し鴨ゆるやかに泳ぎいて川沿いはやもすかんば芽ぐむ
 川沿いはずれて脇の道行くに石塀たかく行き止りなり
 わが指を喚きていたりし栗鼠の眼の今宵の夢にしばらくを居る
 諭す声受話器に聞こえ短日を児の成長の遅遅とあるらし
 おさな児を置きてきたれる娘と語る午後の冬日の移らんとして
 この春の苦みとなさん落の盡いまだ小ささを娘の手より受く

小野雅子 話題

・羊

急死せる人の話でもり上がつてゐるにちがひない今日のサロンは肉親を殺めてしまひし人のゐるわが住む団地テレビに映るパトロールカー長く停まりて寒きな警備のポリス立ちつづける名簿にて名を知るだけの人なれど歳ちかければ痛ましきかな帰りたい故郷はなし帰りたいときはあるなり幼きときへ詰替へを買ふときのためとつておく少々高い洗剤の器明け方に降り出だしたる雨ならむ新聞ビニールに包まれず来る

朝井恭子 如月

・森

真紅なる花を咲かせしセラニウム天じくあおいの別名ゆかし花咲ける小さき鉢植え並べおき自己満足のわれの花園
紅白のシクラメンの鉢並べおき良き事あれとひそかに祈る
如月は父の夫の逝きし月 心閉ざして耐えたる日々よ
寒き日をけなげにも咲くシクラメン「ぶたのまんじゅう」とう別名をもつ
又一つ齡重ねて心愛し時の流れを止めるすべなく
いつしかに母の齡を越えたりと如月の夜を弟と語る

磯田ひさ子 はなもも

・森

子は親を選びて生まれ来るといふ美容師の語うとうと聞く肩こりは近くわざはひが来るからと先祖が知らせてゐると美容師信州の伊那の生まれての美容師のお国自慢は「はなもも街道」美容師の勤むるはなもも街道を訪ひたし逝きし君のふるさと中国のコロナウイルスの余波を受け浅草の街静まりかへる観光と靴の問屋の浅草に「倒産ロード」といふ隠語あり長雨の止みたるのちの三日月のひかり鋭し春立ちにけり

菊地栄子 ステップ

・滝

末端より抜けてくるあり千切れるあり一様ならぬ草々を引く攻防は何時まで続く師走なお宵餅やかに目に立てる草
〈捨てよね、有難う〉簡単な台詞で悲し日々の断舎離
細波が向こうへ向こうへ逃げてゆく渡り鳥すでにおとなう水面診察の度に奏でくる〈風邪引くな〉医師のテノールは我が応援歌
繰り返しブラシ掛けてこの動作次のステップ拒みおらんか
白線の歩道の上に煌めくは青き螺子なり二日のあした

木村文子 ロビー

・羊

生むからだ生んだからだ健やかな香り放てり産婦人科に産婦人科のロビー明るし静けさをもみこむように光は満ちて幼子は床の模様をついついとついでむように迎つてゆけり
うら若い妊婦の足取り確かなりはちきれそうな青空あおく
父親の腕の中にて眠りいる幼子はカルミンしっかり握る
「落し物入」の中にはふにゃふにゃのピンクの象が笑つておりぬ
産声のあがるかたえを生まれ得ぬ子を持つ女がひっそり過ぎる

菊岡栄子 お年玉

・漣

改まる年の初めを我が家にて親族と過ごすわずかな安らぎ集いたる四人の孫へのお年玉想い起せり息子らのころを
当り前のように掌を出す孫四人お年玉には甘くなるパーバ
あわただし三日に施設へ帰りゆく何時まで経つても馴染めぬ中へ
日まぐるしく変わる世界へ背を向けてその日その日を精一杯に

改まる年の初めを我が家にて親族と過ごすわずかな安らぎ集いたる四人の孫へのお年玉想い起せり息子らのころを
当り前のように掌を出す孫四人お年玉には甘くなるパーバ
あわただし三日に施設へ帰りゆく何時まで経つても馴染めぬ中へ
日まぐるしく変わる世界へ背を向けてその日その日を精一杯に

草刈 十郎 炬燵 世

着ぶくれて炬燵に入りし老夫婦次第に無口となりてゆくなり
十二月八日知る人少なくていよいよ昭和も遠くなりゆく
眠る山背景にして思ひ出を積み重ねるる日向ほこなり
現世の理屈に染まぬ子らの短歌しみじみとして心洗はる
砂時計立てればさらさら降り積もる過去といふ名の戻らぬ時間
裕次郎もひばりも遠き大晦日老夫婦静かにテレビ見てをり
あの頃は空腹に泣きあの頃は冬の寒さに震へ耐へたり

國井 節子 ほからかに 春

雲間よりふいに光の橋降りて令和二年の幕開けとなる
ほからかに愛を唄へる揚げひばり春の朝をそれぞれに鳴く
うす紅の乙女椿の咲きにけり写真の孫はいつまで二十歳
早春の風に誘はれ走り出すわが自転車のリムはかがやく
流れつつ鴨も芥も小魚も水のゆくまま光りつつ動く
新型のコロナウイルス対策はマスクに手洗ひあと運まかせ
骨董を買つては悦に入る人を冷ややかに見る私があるた

河野 繁子 陸月 雁

雪ふらぬ陸月暖冬ゆうぐれてまんまるき月かかけいる山
世界より責めのきびしき温暖化老いにはめぐみの白梅二輪
仏の座説教はじめし陸月の野季節はずれの陽氣を背負う
保育園のそばを歩めば網ごしに幼とタッチ冷たき紅葉
どの指もつめたく小さし戦争のありてはならぬ還まわり道
窓ちかき裸木の枝に飛び交える柄長の羽のふわふわ機敏
唐突に柄長の群れの集来し息もつかせず飛び去りゆけり

小西 美智子 白梅 大

初水のはりたる今朝の緑道に白梅は咲くさえさえと咲く
整石の目地につまずくあやうさもちつつ踏み出す今日の一步を
脚力をとり戻さんと向かう道つめたき風が身をあおりくる
通院の帰りに通るはじめての路地は見知らぬ土地歩むごと
「ダイエット中」門前の札におどろけば餌をあげないでと小さく書き添う
山茶花のくれない多き華やきにいつしか心はずみていたり
沖細の友の畑で育てしとタンカン届くやさしその味

近藤 栄昭 博勞 福

島の春牛の市立ち競り落とし大陸に売る祖父は博勞
博勞に坊主か大工を迫られて坊主を選ぶ父の本能
亡き父のお経は良かった卒塔婆の筆も良かったと檀家の人達
父親の中学の友の妹が母との馴れ初め乙女であった
博勞の息子の和尙に嫁きたる鍛冶屋の娘に苦勞かけしと
手鏡に私は三十三歳と母は施設に百六歳の春
母を乗せ車椅子押す施設内 子に還るとう皆さん見つつ

近藤 芳仙 ローマにて 信

仰ぎ見てやがてゆかなむローマより塩野七生の呼ぶ声がある
日常を置き去りにしてたづねゆく二千年前のローマの遺跡
アイパット・ポケトークなど駆使しつつローマ遠近五日を歩く
フォロローマーノのカエサル像に会ひてきし昨日を今日へ時の流るる
悠久の時の流れの身に近しくづれのこれるレンガの遺跡
コロッセウムに死闘の見えて数万の観客席前賦の出口
地下鉄のB線けふは動かぬとローマは日本のやうにはゆかぬ

新しく令和二年の来りけり風静かなれ波静かなれ
 冬の日にドクターイエロー見しことを君に告げなん幼子となり
 冬の日に鮮やけき虹見しことをわが人生の幸に数えん
 ただ雲を雲を眺めよ冬晴れに何を憂うる小さき己は
 憶れていつかは行かん維納へホーフマンスタール・クリムト・シール
 見えざれどつよく切れざる細き糸離れて暮らす君思う心
 ヴェランダにふと見かけたる青き鳥あれは翡翠きつと翡翠

坂出裕子

春待つ

・洛

たまさかのさきはひ得たる心地して光る川面に沿ひて歩める
 むつまじく川面を泳ぐ親と子の鳥のすがたに立ちつくしをり
 川辺より眺むるのみに大いなる幸をいただく鳥の姿に
 水を見てころうるほひ鳥を見てころ楽しむ川べりの道
 春を待つよろこびいだき川の面を鳥の泳げる魚の眺ねるる
 遠山の雪に映えつつ川の面を時折ひかる魚のいろこの
 枯草の中にほのかにさみどりの芽立ち見えをり春待つ岸辺

佐久間 晟

日乗(三二)

・濱

ブナ森に独り入りゆき一千首作りし歌も今は何なる
 この頃の心の養えは何ならんブナ森一千首の情熱は何処へ
 まだ行けるわが歌の道は果て知らずここで留まる筈はあらずも
 漸くに心の強さは甦る、歌、歌、歌に生き来しわれの
 子の嫁と行くドライブは九十歳半の今のわれには最高の楽しみ
 偏屈なわれを守りて七十余年妻の苦勞も唯事ならざらん
 有難う勝手極まるわれに添い七十年を守りくれし妻よ

亡き夫が咲かせしと思ふ白き百合露の光るを朝々見つむ
 しろじろと山茶花咲ける朝の道夫亡き冬の始まるらしき
 お茶ですよ書齋の夫を呼びにゆく「紅マドンナを頂きました」と
 愛用のコーヒーカップに有りし日の如くに熱きコーヒー注ぐ
 会ひし事なけれど論文送り来て夫の返事を励みになししと
 私には無邪気で優しき夫なりき只在るだけで楽しかりしを
 三時です一緒にお茶にしませんか好きなケーキとカモミールティ

椎名恒治

回想

・橋

大陸に兵たりし七十年前の一夜に熱出でて死せりき同郷の友
 初年兵たりき海越えて山東省の町に一年を過ぐ
 星ひとつ襟にひとつ幹部候補生のままにて君は死せりき
 ふるさとの母へは名替の戦死とぞ知らせたりき
 新兵のまま命なき七十年過ぐ彼の名前さへ忘る
 ふるさとはいづこなりし新兵の星ひとつにて死に別れたり
 たしか房州の生れにて「千葉」と呼び馴れき一年を

鈴木結志

ゆめみぐさ

・福

天染めて「挿頭花」咲く優美さにいとど拍車をかけたき思い
 咲き映ゆるさくららの花にひき込まれ無上の思い計りがたしも
 花言葉「優れた美人」ゆめみぐさ亡妻に思いをかよわせて咲く
 天がいを飾るさくららの爛漫に「欣求浄土」はかくやと思ふ
 かな文字の流れやしだれ挿頭花小町身をふる形にそよぐ
 詩の泉「温故知新」の四字熟語自らに重ね古典に学ぶ
 文人も識者もたたうさくら花一瞬の風に舞い上がりゆく

関根 榮子

蛭梅

・埼

薄雪の庭を透かせる硝子戸にシクラメンの花のひしめく紅は
クリステイーに捧げると知れば映画「ナイブス・アウト」観に行く
早咲きの椿二、三本とりわきて山椿の花に来る鳥多し
宝登山へ蛭梅見に行きしはいつのこと近くの寺へ蛭梅見に行く
わが庭にも蛭梅ありし年月の小さき庭の消長想う
毎日が休日のごと過ぎゆけどいつか「無用の用」もあるべし
あの人もこの人もマスクして街の中光冠は美しきにコロナウイルス

関根 和美

丘にたつ村

・埼

背き目のシャム猫チヨ子に伴われ「あかつきの村」めぐるしあわせ
十字架の上の小窓に薔薇一輪やさしく揺れいて御堂明るむ
高原に似る丘なるも南面にひらけ望める前橋の街
赤き字に「犬・犬」と書き死すもあり誇り奪われ炎の中に
ふくよかな笑みたたえつつさりげなく信仰の核心突く佐藤さん
穏やかなサン君の顔苦しみは解かれ溶けゆく天のまほらに
なにひとつ持たざるひとの何というゆたかな恵みわれらに遺す

高尾 恭子

年明け

・大

終電は果てなき路を走るらし胸に砂漠を抱えてねむれ
コンビニの日付かわりて逝く年や百円珈琲の温もりを買う
年明けのCNNの通訳が流れ作業に報復を追う
「わが軍」にあらずや核をみる間なく父が息子が中東に発つ
ニッポンを盾に長衣をひるがえす医師は日本人ゆえ標的と散る
言い訳はしても釈明せぬ群れのネクタイだけが真直ぐにならぶ
悪い夢を喰らい残して年明けの痕は純米吟醸に酔う

高津砂千子

陸月

・風

頭痛なし筋肉痛もなきわれをインフルエンザにめずらしと言う
届きたる友の絵手紙ごわごわの柚子の手ざわり伝わるような
小さき芽のあまた付きたる桑の木に実のなる頃のしきり思わる
病む友の心つつみてほしきものパールカラーのハンカチーフよ
一月と思えぬぬき庭に降りキヌサヤの支柱立ててゆくなり
蝶とまごうグリーンピースの白き花とときに揺れあい生るるはなやき
有田焼のふたはもようの飯茶碗まよわず求む陸月の町に

滝田靖子

異動

・新

「十二国記」読んで涙が止まらない何だよたかが小説ぢやないか
涙もろくなるのは脳の老化だとにべもないまつたくナスつてやつは
定年を迎へる二月青天の霹靂異動命令が出る
定年の後もパートに働くと言はせた挙句にこの仕打ちかよ
人生の一大イベントと楽しみにしてゐた定年なんかつまんない
みなさんのおおかげで無事に定年を迎へられたと言ひたかつたな
結束の強き病棟を離れきて同じフロアの違ふ病棟

竹下 妙子

歌のこと

・霧

歌のごと風は美し若竹の葉をそよがせて吹き過ぐるとき
幾年を生きつぎて来し桜木の春の小雨を浴みたるたりけり
春の陽にシロツメグサの風にゆる四葉なれども一葉足らず
堤防に一つぼつんと椅子ありてひとり来たりてまたひとり去る
年ごとにくらから等も「くひとりなり縁に置かれし揺れ椅子ゆれぬ
音のなき夜の卓上にかすかなるケトルの温み両手に抱く
春ざむの小川に枯葉流れゆく吾がゆきどころ知らず佇む

窓を開け黎明の空を見上ぐれば水母のやうな月浮かびある
 エアコンが呟くやうな音を出す金属疲労の今日寒の入り
 一瞥すればいいのだけれどゆつくりと見るふりをする桜満開
 体温のじわりと上がる八度五分流感なれば寝てやり過ぐす
 カレンダーのびろんと曲がつてゐる紙も一月ほどで真つ直ぐになる
 暗黒の深海にみづから光りつつ癒ゆることなき寂しさを抱く
 練炭の穴がほのかにひかれるに記憶の母とわれとかざす手

田土才恵

処分して

処分さるるひとつ一つに思い出はにじみ出で来る際限もなく
 執着のなしとは言わじ溜め置きし画材の月日はわれの足跡
 克明に力をこめて描かれたる健やかなりし母の絵手紙
 窓に見る景色を描きし色鉛筆芯の尖りも鮮明にして
 封筒のあわいに顔を覗かせて母手すさびの葉出でくる
 体力のあるうちですよと自らに拍車をかける大片付けを
 わが胸に秘めて終われる諸々は遠き彼方へ藻屑と消えん

玉井綾子

大人

コンバクトの鏡の汚れ何日も拭かず朝も眉間もくすむ
 ファンデーション四隅の残りをこそけ取り毛穴の口に何度も運ぶ
 学校も競争の場と知りてより双六の負けに泣かなくなりし
 つり革の下タブレットに暗記用シートをのせて制服の浮く
 サクマ式ドロップス缶ものと鮎のジッパーバッグも夢ぶちまける
 蜜が抜けほけてしまつたりんごでも林檎と思ひ食せる大人
 申ジエを持ち出すわれにコリアンの智愛は誇りと和みを見せる

虎谷信子

歌会始

宮中の「歌会始の儀」放映さる。古式ゆかしき 披講のつづく
 両陛下の御歌 若きらへの思召し。ひたすらなるに 心篤くす
 令和のお題「望」なるかな。歌うたの 奥床しきに 心うたれぬ
 歌詠み来し 一代思へりささやかな、幸生れかしよ 災どきも
 節分の宵なれ 氣負ひ豆まかむ。煙がへしの梁までとどけ
 福豆につきこし 鬼の面やさし。鬼は外なる 追儼は止さう
 暖冬で 水仙あまた咲きたるに、手分けし誰彼 先立ちたるも

中島央子

雨の庭園

大雨はA3出口を叩きつけ「清澄白河」落葉にまみる
 清澄の庭ぬらす雨江戸よりの歴史のなかにわたくしもゐて
 此処に立つここより他に無き場所と雨に交らふ伊豆の青石
 青鷺の一声のこし翔びたちぬ人間きらひと言はんばかりに
 冬寒のけやき大樹に三羽四羽だみ声かはす嘴太鴉
 雨雲の切れ間より射す陽の光この後まだ一幕あるやも
 細枝を窓にひろぐる冬檸檬状七号の雲を掃きゆく

中島義雄

冬の虹

まだ年始はや十二月疾風のごとく流れて去年今年あり
 ふゆしぐれ薄るる方に虹立ちぬ。ピース示して子が戻りくる
 虹消えて広くなりたる冬空をドクターヘリが高くもどりぬ
 雪晴れといふべき季節の雨晴れて寒を越したる白菜太る
 首あをく鳩の遊べる庭土を蹴散らして届く徴税令書
 着陸の剎那の弾みも声もなく不安重たきチャーター機着く
 救急車が迎ふる機窓に人見えて「武漢」を背負ひしチャーター機帰る

永塚節子

相模の国

・銀

さねさし相模の国の一之宮寒川神社は小春日のなか
 平成の修理終えたる本殿の屋根伸びやかに背空のもと
 寒川比古命と比女命 関八州を護り来し神
 寒川さん八方除の神なれば信心浅くも拍手を打つ
 五月五日相模の国の国府祭 五社の神輿は神揃山へ
 参拝のあと昼食信号を三つ数えてそば屋を探す
 常陸より相模の国へ移りたれど関八州を出でしことなし

萩 葉子

五街道

・銀

五街道ともに歩いた縁にて会えば話のつきることなし
 小さめの三角お結びふたつもち歩いた頃がただ懐かしく
 旅の友の織部の茶碗と間道の仕覆もとめぬ小ぶりがよくて
 一筆箋の美しい文字の一言にときに温かく励まされたことも
 驚いたのはむしろ私 グレープフルーツ突く鳥と目があう
 鳥とは思えぬ存在感外に出た私をきつと見返す
 人のような仕草に見えたと妹に話して午後の日課が終わる

白子れい

疏水べり

・洛

東の空あかるみて初日の出双の掌あわす疏水べりにて
 いて会える人まばらなり初詣ことしの無事をゆたかな心を
 会いたきと賀状に添える教え子ら閉ざすころに明かりの灯る
 草の霜ひかる疏水辺伸び縮むわが影追いつ追い越されつつ
 流れ止めし疏水の底に小鷺一羽脚ちぢめ佇つ寒に入る朝
 ひと目ごと気力も手足も萎えゆくか思いしことの半ば残せる
 まっ直ぐに生きんところに誓えともよろよろと踏跟めく日々よ

ばばりょうこ

億万長者

・鹿

見上ぐれば下弦の月かかりおり小寒の背に溶けんばかりに
 さ庭には千両万両で占められてこれでは私 億万長者
 新たなる年を迎えるに「故ありてお年賀を辞する」ハガキとせしむ
 あたかなお正月なればバツタ来て コクンコクン とあいさつをする
 幼子の文字で おめでとう と賀状あり あて名なき一枚ポストにポツンと
 腑に落ちてお年玉用意す あの子だろ 多分あの子だ まるいおめめ
 おしょうがつ まろやかなりし言の葉を 今度の年も押し葉としたり

浜谷久子

七草

・地

七草を摘む手かじかむ霜の朝芹の葉か細く一本二本
 定番の蓮の香り芹と競る粥の真みどり初春が立つ
 せりなずなヨモギはこべらホウレンソウすすなすしる
 そこかしこ随に芽吹くカモミール白い花摘む季節が見える
 カモミール風に揺らして白い花摘む日はこの子の誕生日のころ
 花のない庭を万両千両の赤い星つぶの照らす初春
 黄水仙の短く太く芽吹く季を見わたせば並べて固い芽を持つ

浜本芙美

露草

・夢

さ庭辺の隅に露草のひと花を見しが私の秋のはじまり
 ハイビスカス並びの花鉢に枝のばし挨拶すること花ひらきたり
 おそ咲きのハイビスカスのひと花の目一杯のほほえみこぼす
 ハイビスカス朝の土に落ちていつ苦悩のさまの花をよじりて
 花弁をよじりて落花のハイビスカス終いの美しさをたなごころにす
 思うまま外出のかなわぬわれのため季節の花鉢を友の置きゆく
 朝一番雨戸をくれば目先に心づくしの花鉢並ぶ

檜垣美保子 位置 昴

山は雪こたつにもぐり顔みえぬ位置にふたりは話しつつづけて
真夜中のつづきの未明卓上に土産のレモン黄のいろ硬し
関係のくびきのほどけ亡き夫の母に呼ばるるわが名前なり
右腕をははの左の腕に貸しかすかなる坂のぼりてくだる
巨大なる高さの一基忠魂碑ひっそりとあり紅梅の花
みぞれ降りたちまちとけてかがやけばとびかう目白の小さき囁り
ぬかるみをとびこえて尾の曲がりたる猫が消えゆく林間の道

福田庸子 睦月たつ 今

音消して雪降りゆかん睦月たつ闇にし満つる太古おもへり
賀状仕舞ひを宣言したる人より賀状届きとまとひとつも元日の朝
破魔矢買ふ客は少なし善光寺の参拜変はるを伝へくる友
会話する能力なくす子らを横に井戸端会議大いによろし
秋色は稲穂にあらず外来の泡立草なりハウスの中も
野仏の笑みを残して刈られゆく園場整備後田は広がりにて
段丘を崩して去りし台風が夢ばかりなり水細き川

藤田美智子 さわざわ 新

冤罪の松川事件も語られて 夜間中学のコーヒーブレイク
膝のうへの楽譜をそつと叩きゐる少女の指より音は生まれる
庭先に餌を啄むひよどりは水飲み鳥に似たる動きす
〈そのつもりなかつた〉とそのつもりなき言の葉にこそ傷つきゐるを
トリチウムつていつたい何のことだらう相馬の海の底のざわざわ
掃蕩できぬ人らの思ひを吹き飛ばす〈ふつこう〉のなかに潜む促音
たぶんこれが最後の握手 見つめくるるまなこに強き力はあるも

藤森巳行 豊科 銀

東京駅行き交ふ人で溢れてる人口減少うそでないかい
竹ボーキ買ひに出てゆく妻に言ふお空を飛んで帰つておいで
大股でひたすら歩んだ我が人生振り返らずに喜寿を迎へむ
重たげにカバンを下げたセーラー服豊科駅に面影を追ふ
ふる里の町は日暮れて雪が舞ふ我が初恋は遠くなりたり
手を繋ぎ歩んだ岸辺梓川消き流れは今も変はらず
安曇野に粉雪が舞ふお揃ひの手編みのマフラー遠き思ひ出

船田清子 ミスラとミロク 天

BSのシルクロードの映像にのがさじと見入る三時間半
蘭州の西六〇キロなる黄河の岸に弥勒の石窟炳靈寺あり
二七メートル岩より生れし弥勒大仏前なる河へのけぞり仰ぐと
千仏の壁画上部に修行する弥勒びつしり兜率天の景
救世主ローマのミスラは東漸し中央アジアゆいन्दの弥勒へ
バーミヤン 東釈尊・西弥勒大仏爆破の後の荒廃
此岸なる苦しき人生に耐へよと弥勒はなべてやさしく笑むと

牧雄彦 老い 大

学校の前に桜のトンネルを作りし木々は遂に朽ちたり
太き幹空洞となり脂を噴き老いたるになほ花を咲かせき
卒業式、入学式の生徒らに満開の花見せて幾とせ
桜木のいづれも老いて倒木のおそれありとし伐り倒されぬ
七十年の歳月花のトンネルを作りし桜の木は伐られたり
大きう抱へて老いし桜の木伐り倒されてひかる切り株
残されし桜木五本枯れ枝にとまりてヒヨはとほく見てゐる

松浦禎子

まほろば

・羊

釈尊に奉じし若き阿難陀彫像を拜す令和元年

藤原の栄華のむかしを幻に大和国原いままほろば

慈悲深き無著立像の静かなるまなざし届く今日のわたしに

無著菩薩ささぐる壺よりあふれたる何かは知らず八百余年

北円堂より移りきたりし無著像国宝館の四囲を引き締む

神の腹食み残したる草を抜く仏に仕うる人ふたりいて

興福寺めぐり来たりてそば処山崎本舗に今日は二人で

松永智子

光

・嵐

きさらぎの日のかけあはくひとひ照りかたぶくときのま障子あかるむ

蒼白く昏れのこりたる寒の光不意なりひととき障子にあそぶ

寒の光障子にさしくる音のなきひととき待てりゆゑよしあらず

あはあはとはなやぐ寒の日の光ゆふへ衝のうへにふりくる

夕ぐれのひととき明るむ日の光障子にありてはや消えむとす

障子にさす寒の日のかけついと消え移れゆくはやしかなしみならぬに

蒼白く昏れのこりたる寒の光ひとときのち消えゆく音なく

三浦好博

スイッチ

・鈍

小寒を過ぎて寒さがマックスにスイッチ入る桜と三浦氏

渋滞の原因に吾を入れないでなんでこんなにアア混んだヨー

家の中を風切り歩くと言はるれど木枯し一号今年は吹かず

あまりにも小さき命山茶花の周り飛び交ふ目白子目白

一斉に離るる風船目で追へば初日に輝く雲に消えたり

日記付ける我に踏み込みあれも書けこれも書けとぞ 自分でつける

孫と言へど小児性愛に馴れてない我はつくづくベットも苦手

宮本靖彦

焰二十五年

・凌

暁の豪雨とイランの攻撃にトランプは吠え子歳あやふし

朋友の最後の賀状残ししが今年も増えて文箱にあふる

三極に白く輝く蒼濁ち初歌会にいそいと行く

絶ゆるなく燃えつく焰二十五年竹灯明に消せぬ悲しみ

故里の神戸焼けゆくをテレビに見絶望の日より早や二十五年

くつきりと水脈引く鴨の旅立をせかさやに吹く温き寒風

梅田ゆく人の過半は新肺炎避けむと免符の白布を飾る

三好聖三

田舎の記

・伊

メジロらのつつましやかな声ありて満天星の枝の揺れおり

猫と猫鼻を寄せつつ静かなり冬のうららの陽の射すところ

この村を流れる風が嫌いです女はそんな言い方をする

エソシカの親子が歩む草原はひかりおだしき秋を降らせる

不機嫌な羊の群れが北へゆくニッポンという国の青空

ドンクリを銜えて頬を膨らますエソシカリスは繁忙である

政治家が政治屋でしかない事を見せつけられているのだずっと

御代田澄江

めじろ

・茨

中元歳暮送り合ふ慣ひ卒業せむ 姉・妹と語りつつ侘し

重々と垂るるみかんを収穫し仏に供へ心の晴れぬ

山茶花に今朝来し小鳥めじろにて花から花へ蜜吸ひ渡る

今日はまためじろ恋人連れ来しかやがて番ひて常連となる

天候の日替り定食変化激し温帯気候いづくへぞ去る

不慣れなる本づくりにて あつばとつば す初めて使ふ言葉がびつたり

マーブルケーキ友へ焼かんに腕の力衰へ妥協しつつ焼き上ぐ

茂木 斌

葉王院初詣

・埼

元日の葉王院の参道に笹鳴き聞けばよき詣でかも

「かんば崩壊」なる本も出て現場ではあはれ忘新年会きつく御法度
海星の控選手にゐるひとり姓名やよし金色鱗太郎

青信号点滅はじむ大通りダッシュ渡る足いまは無し
ポヘミアンタイつて何だ今さらにグーグルに聞く辞書より早い
ときがわの弓立山にある巨岩男鹿岩見んと落葉踏みゆく
二横綱休場したる初場所を盛り上げ沸かす徳勝龍は

もとむらしげと

焚火

・そ

連れだちて一里の道を通いけり二学年下の友とふたりで
冬の間を工事現場で稼ぎいる人ら道にて焚火しており
現場まで運ぶトラックを待つ間焚火しており霜おりし朝
手をかざし焚火に集まる人の顔皺多くして笑みも多かり
火に向ける顔が火照りて手も耳も温もれば又学校へ向かう
田の中を抜ける道にて霜の置く株を踏みつつ近道をしき
農の子の朝はやければ裏門の近くの時計が七時を知らす

八乙女由朗

さくら花

・柴

樅の木の峰を辿れば目見に頭つ山本周五郎・大池唯雄
長かりし逆臣汚名の原因甲斐この地の城主にありていじらし
武士の子に生まれし故に絶たれたり悔やみは去らず嶺あゆむ時
縁の下の土三尺を除かれし二の丸跡跡に仁王となり立つ
船岡はさくら百選の一にして外国人がさくら土手行く
東北本線をまたぐ千桜橋に立ち人は花の香を深く吸いおり
国費にて花見をなすはいびつなり日本文化の象徴にして

山下 雅子

ゆとり

・習

ゆたかなる千両の実のあかあかとつや増し令和の水雨に打たる
大寒にふくらみ赤み増すアロエ間なく開かんげなげなりん
たくましき厚なる葉のしげり合いアロエ一りん守る姿に
箱根路は雪と聞くや間なくして千葉に降る雨みぞれに交る
たちまちに雨は雲に雪になり町の噪音吸いこむごとし
ほっかりと小春のひかり浴びながらこはるびよりの余韻にひたる
雨上がりふつと町へ出てみよう一年ぶりに味わうゆとり

横田 敏子

暖冬

・福

夢ひとつ掲げてゆかん冬晴れの初詣でに祈る秘めしその夢
初競りの手締め響く豊洲市場大間のマグロ一億円越す
ふんわりとベールのように降りし雪つかの間に消ゆ冬の陽温し
暖かき日差しに脚を延ばしたり通い慣れたる開成山公園
公園より久々眺む安達太良の雪化粧美し 心の山なり
バラ園も木々の芽吹きもまだ固き桜並木をそぞろ歩めり
雪の無き今年の冬の暖かさ しっべ返しのかかを怖る

吉 永 惟 昭

日向ぼっこ

・熊

如月の日向ぼっことしゃれてみる恐れ入谷の鬼子母神さま
せねばならぬ事多かれど日向ぼっこ春の恵の遠くにあれば
日向ぼっこ見つめただけで蒲公英の白い穂絮が翔び散りてゆく
ウイルスは日向ぼっこをしながら世界を席捲し続けゆくのか
日向ぼっこいらだち募る物忘れあの一ひとの名が思い出せない
国会はこれでいいのか日向ぼっこまどろむ我に思案なけれど
光陰は矢の如しです日向ぼっこもう病院へ行く時間とは

久我 田 鶴 子

しほりかす

・羊

この春はもう卒業と孫を言ふ母の言の葉ほろほろこぼる
 あたたかき冬の恵みを母の上に明日もひとりで起き上がれますやう
 ねたみそねみ隠さぬ母は二女のままま亡きひと言ふは懐かしむごと
 もう何も出てきませんわしほりかす二月のわれを言はば言ふべく
 日常のこちやこちやに埋もる心地よき歌などなくても生きていけるか
 選ることに夢中のひとが割りこみ来魚の棚とわれとの間
 ベッドにて書く文字を託び原稿は生きるおのれつらぬく樽へ

香川進の生きものの歌

18

田土 成彦

・ 唄うたの昨夜鳴りるしが唄うたながくしきは死にたりはがねのう
 へに
 『濟』の「鉄の歌」より

私の居住する淀川沿いの赤川村東部に鷗野とよばれる二つの
 河川にはさまれた低湿地帯がある。大坂冬の陣の古戦場として
 知られているが、その名前の由来は旅鳥の鳴が春・秋に居留通
 過する地として知られていたからであろう。

三夕の歌のひとつとして知られる西行の「心なき身にもあは
 れは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」があるが、この「鳴立つ」
 は単に飛び立つというよりは渡りに飛び立つ意味が含まれてい
 るように思う。さて、唄は晩秋から初冬にかけて吹き始める風
 で、平均的には十一月八日頃にその一号が吹く。渡りに遅れた
 鳴は（種類によっては渡りをしないものもある）その気象に耐
 えることができず命を落としてしまったのだらう。シベリアか
 ら南国まで数千キロを旅する耐性と飛翔力を持つ彼らも一寸し
 たアクシデントがあれば案外もろくその生を終わらねばならな
 い。「唄ながく」は鳴を捉えて簡潔で的確な表白だと思う。そ
 の死に場所も、作者の製造担当する新しい鋼の上という実に無
 機質な、いわば場違いな場所であることが鳴の印象をより彫り
 の深いものにしてている。乾性度の高い研ぎ澄まされた表現の奥
 から作者の共に生きる命に対する哀惜が滲み出てくる。

●お知らせ

三月号の15ページでご案内しました「現代歌人協会主
 催・公開講座」は、全面的に中止となりました。新型コ
 ロナウイルスの影響によるものです。

楽しみにされていた方は、来年度にご期待ください。

宮柗二と香川進（続の続）

久我田鶴子

「詩歌」昭和二十七年一月号には、香川進歌集『氷原』の囲み広告の掲載がある。曰く、「注目すべき戦後作品四百首、『新しい暴力がこの中にある』と宮柗二は云ふ。これは著者の半生を賭けた背水の陣である。」

この文章が誰の手によるものかは、署名がないので分からない。版元である長谷川書房の作成であったか。この広告で、宮柗二が言ったという『氷原』における「新しい暴力」とは何を指しているのだろうか。気になるところだ。

『氷原』の批評特集号である「詩歌」昭和二十七年十月号の中で、前田芳彦が「宮さんが『暴力』といふ言葉をもつてこの歌集を集約したとすれば、作者が嘗ていつた『源泉感情』に対する生みの力を指したのかも知れない。」と述べているが、実のところどうだったのだろうか。

この広告は四月号にも『前田夕暮遺歌集』の広告とともに掲載されている。さらに、七月号にはこれとは異なる前田透の言葉が添えられた『氷原』の広告がある。「ホモ・エコノミクスはまた寂しい眼をもつてゐる。だがその寂しさは感傷ではなく何か人間の尻尾を踏んづけたときの痛さからきてゐるにちがひない。」というのが、『氷原』に寄せた前田透の言葉であった。

*

昭和二十八年五月に創刊された「地中海」。表2には、地中海に関連した言葉が巻頭言のように載せられた。創刊からほぼ一年後の昭和二十九年十月発行の「地中海」には、そこに宮柗二が詩のような文章を寄せている。

遅れ遅れてきた僕は、アジア土耳其の土を蹴つた。寂しかったけれど、僕は訣別する決心があつた。そして、多島海を泳いできて、イオニア海へ出ようとしたとき、クレタ島を過かに一瞥した。波の輝くあひだに、クレタも亦その突端を光らせてゐた。僕は信用しないのだ。海が輝き陸が光つて見せるからとて。もう僕は振向かなかつた。僕は地中海の真中へ泳ぎこむばかりだ。しかし、万国航行法を無視し過ぎてゐる船がある、水平線に。あの旗を飄す無恥と傲岸。ああ、僕は耐へ得ない。神も許し給はぬ。ポー河畔の閩米を運んできたに違ひない。アドリア海をくだつてきて、どこを指すのだ。あら、騒しい羽音は何だ。情欲に満ちた啼声。気狂ひ候鳥め。僕の周りの、海水は一斉に透きはじめた。僕は垂直に下降する。地中海の表面からとほい海床にむかつて。

海が輝き、陸が光って見せても、信用しないのだと言う。そんなものには見向きもせず、地中海の真ん中へ泳ぎこみ、そこから垂直に下降し、表面から遠い海床に向かうと言う。宮柗二自身の生き方であり、「地中海」へのメッセージでもあつたか。光り輝く誘惑や、無恥や傲岸。情欲からも遠ざかり、深くへ向かつていこうという——。それにしても、宮柗二は詩人だな。

ランボーを連想してしまった。

*

創刊から二年、昭和三十年五月発行の「地中海」は、前田夕暮没後五周年の遺稿と回想を掲載。ここにも宮柊二の寄稿があり、タイトルは「夕暮百態」原画であった。

戦後の夕暮先生の言葉のなかには、白秋先生に対する異常のなつかしさが響いてゐた。このことに關するおもひは、私の胸に永久にとどまるだらう。

何時だつたか、——私は記録をしないが、香川君には記録癖があるので、念のため同君に頼み同君の記録を調べて貰つたら、昭和二十三年六月二十七、八日の由——香川君と飲んで酔ひ、香川君の家に行つて泊めて貰つた。広い二階間に目覚めたら雨が降つてゐた。酔ひざめ後のもの倦い体の調子をもてあましてゐると「宮君が来られてゐるさうネ」などといひながら、階段口からふつと夕暮先生の顔があらはれた。夕暮先生のお宅は香川君のこの借家の前隣であることを知つた。

御挨拶を申上げ、固くしてゐると、先生はごろつと広い畳の上に寝そべられた。私も誘はれたやうに、そのお側にごろつと横になつた。夕暮先生は屈託なささうに、私を相手に、あの人懐っこい口調で、早口に一言二言いつては間を置く、といった調子で話かけられる。暫くすると、起き上つて縁の椅子に凭りかかられた。香川夫人が濡らしたタオルか何かを先生の前の卓の上にもつてき置いて去られる。先生は極く自然にそれで顔を拭き、窓の外を眺めておいでになる。私は冷

い畳の感触が気持ちいいので、横になつたもの儘の姿勢である。香川君も腹ばつた格好で、先生に「センセは」などと、例の特異な発声法で何か日光時代のことを、お質ね申上げてゐる。しかし、香川君の寝そべつてといふのは、私の記憶違ひであるかも知れない。香川夫妻の夕暮先生に対する応接が、自然で敬虔で、実にこまやかだつたのを羨み、そのことだけが強い印象で、それ以外の状態に対する記憶は斯う書いてみてもどうも自信がない。

そのうちに夕暮先生は不図、

「ああ、あれを——」

などと独言を云ひながら籐椅子を立たれ、階を一段一段ストンストンと下りてゆかれた。まもなく戻つてこられた先生が手にしておいでだつたのは、白秋筆「夕暮百態」だつた。これは「日光」の本文や、裏表紙に、また夕暮先生の「緑草心理」の挿画などに用ゐられたものの原画数十枚だつた。

挿画がある以上、その原画があると思はなくてはならない筈なのに、私はそれまでそのことを考へても見なかつた。つまり、真筆の実在箇所を考へてみたことがなかつた。それが目の前に突如として現はれたのだから、正直いふと驚駭し手が顔へた。白い紙に丁寧に包まれ大切にされてある原画を、私は坐り直して一枚一枚見ていつた。

私は息づまるばかりだつたし私の手もとを覗きこんでおいでの夕暮先生は凝つきつといふ顔であつた。

私にもいくつかの、残して置きたい夕暮先生に対する想出があるが、これもその一つである。

全文を書き写した。いい文章だなと思う。

ここに登場する夕暮先生、香川進と夫人、そして宮柊二。そ

の場の空気やそれぞれの声色やしぐさが自然と伝わってくる描き方の中に、自ずと人柄や互いの関係まで見えてくる。夕暮の屈託のなき、人懐っこい口調。夕暮に対する香川夫人のさりげない心遣い、それを受ける夕暮の自然な態度。宮をして「香川君も腹はった格好で」と思わせるほどに、香川進と夕暮との間に流れていた親密な時間。香川夫妻の夕暮への接し方を「自然で敬虔で、実にこまやかだつたのを羨み」と宮が書き残しているのに心が留まる。香川夫妻にとつて、前田夕暮はあくまでも「夕暮先生」だった。どんなに寛いだ時間を共有しようとも、前田夕暮に対する敬意は揺らくことがなかった。その様子を實際に目のあたりにして、そうした師弟関係にあることを宮柀二は羨んだのにちがいない。北原白秋と自分との関係、そして、すでに白秋がこの世にはいないことを、おそらく思いみながら、この文章、夕暮から白秋筆「夕暮百態」の原画を見せられて、一枚一枚を手にとつて見ながら、息づまるばかりだったという宮。その様子を覗きこむ夕暮の顔。白秋と夕暮との間に流れた親密な時間が「夕暮百態」となって残されているというところを、夕暮がどんなに大切に思っていたか。それは、この時の「凝つきつお顔」と表現された夕暮の表情によく現れている。この文章のはじめに「戦後の夕暮先生の言葉のなかには、白秋先生に対する異常のなつかしさが響いてゐた。」とあるが、それを実感した出来事の一つがこれであったのだ。

昭和二十三年というから、これを書いた七年前の出来事である。それにしても、初めて泊めてもらった香川進の家（借家だが）での宮柀二の自然体。そこにはやはり、日頃の宮と香川との付き合い方が反映されているにちがいない。余計な気遣いの要らない、うちとけた関係だったことが伺える文章である。

現代歌人協会主催 朝日新聞社後援

第49回 全国短歌大会

開催日時 二〇二〇年十月二十五日(日)

会場 学士会館、東京都千代田区神田錦町三十二十八

選者 沖ななも・奥田七羊・川野里子・栗木京子・

小島なほ・斉藤斎藤・笹公人・佐藤弓生

林和清・御供平信

賞 全国短歌大会賞・朝日新聞社賞

学生短歌賞・選者賞

入選発表・入選歌批評・授賞式

特別選評 奥田七羊×小島なほ

※入賞作品は朝日新聞・短歌雑誌にも掲載されます！

◆ 作品応募要領 ◆

作品 新作五首以内（何組でも可 未発表作品に限る）

参加料 一組 三千元（学生は二千元）

送里方 B4判の用紙（四百字詰原稿用紙も）に作品を書き

右の欄外に郵便番号・住所・氏名・年齢（学生は学

校名）・電話番号を明記。

応募料は、現金書留または郵便為替を同封。もしく

は郵便振替により送金（振替口座 0130-2-10919

は必ず受領証の写しを同封してください。）郵便切手

は不可とします。

〒100-0003 豊島区駒込一―三十五―四―五〇二

現代歌人協会 全国短歌大会事務局あて

二〇二〇年六月三〇日 当日消印有効

締切

今月の二人

移ろい

吉田 明子

春風に押され心地の雨雲の隙間に入る山科の街

寒きより待ちいし桜と菜の花の共演極みていのち溢るる

朝日射す音羽の山の芽ぐみくる彩も形も優しく増しつ

気まぐれな春の嵐の置き土産 音羽の山の冠る大虹

朝顔の夜と別るる刻知りて淡紅濃紺清しく綻ぶ

炎天の晴れ極む街歩み来て夕陽と別るる日傘の匂う

妹と二人向き合いて飲むコーヒー香にある想い語らず伝うる

贈られたるふたつの柿の朱ぬくく深しんの夜は人に逢いたし

秋愉し応奉の雁に会いし帰途梅花うつぎの白き香に会う

それとなく慰められて立ち止まる金木犀の香は母に似て

吾のため友送り来しニゲラの種 花言葉佳き「不屈の精神」

戴きし春咲く花の種播きて独りのこころしばし忘れぬ

メタセコイヤの葉を失いし枝ぐり街灯の光師走を告ぐる

ひこばえ

ひこばえとは、伐った草木の根株から出た芽や若枝のことだそうで、新しく伸びる柔らかな緑が天を衝く姿が力強く思えて、大好きです。

振り返って、自分は年を重ねた老人に過ぎず「人は創めることを忘れなければ、いつ迄も若くいられる」と聞きますが、何を、どのように創めればよいのか分からず、切り株のままに生きておりました。

そんな昨秋、白子れい先生が短歌を詠んでみてはと勧めて下さいました。今まで学んだことが無かったのですが「全ての事に素直に向き合い、心に感じることを短歌の形で表せば良い」と教わりました。多くの失敗も丁寧に直して戴き、漸く歌作の楽しみが少しずつ太陽の温もりのように身に沁みて来ました。又、金澤孝一様からも誌上に載りました拙詠を励ますご講評を賜り、とても嬉しく力付けられました。

この度、「今月の二人」への執筆依頼を頂き、白子先生の「前進するための一歩だから」とのお言葉に背中を押されて、奮起しながらお受けいたしました。

今後、短歌が私のひこばえとなり「地中海」で萌えていけるよう希っております。

今月の二人

海

土井谷恭子

恋おわりたったひとりで海に来て見えぬ未来を探していたよ
 ブランクの後に決まりし学校は海にかこまるる周防大島
 朝夕にながめ通いし海の青ふさわしき字は碧とぞおもう
 新採用は地元に住めと校長は教員住宅をわれにあたえき
 山の辺のみかん畑の住宅は広くしずかな独りぐらしよ
 当分は手入れ要らぬと父の手で杉のかきねは丸刈りにされる
 海沿いの二階の部屋にうつり来て波の音聞き眠りにつくも
 一年の仕事成し終え同僚と春の陽あびて海に向かいぬ
 取りすぎた牡蛎とワカメを配りしは忘れられない春の大潮
 夏のみず冷たきことに驚きぬ海流速き伊保田の海は
 瓦とび波音はげしき夜なれば布団かむりて夜明けを待てり
 君の声あらしの夜は聞きたきに揺れる二階でただ電話まつ
 「大丈夫おまえは人に助けられる」結婚前夜の父のはなむけ

父のはなむけ

私の結婚式前夜のことです。兄一家が同居する実家に遠方から五人の親戚が泊まりに来ました。にぎやかな中で、嫁ぐ前の挨拶は無しにしようと思っていると、酔った父が、

「おまえは人に恵まれている。今までに困った時、必ず助けてくれる人がいた。おまえのことは心配しない。」とぼつり。その時、結婚し、別居生活を始めるこれからの暮らしに覚悟ができました。

悩める時、苦しい時、うれしい時……いつも海を見ていました。父も母も海近くの里で育ったからでしょうか。私達夫婦も海が見える地に家を求めました。

あれから二十八年。教職を六年残して去り、二人の息子が巣立ち、昨年短歌に出合いました。高津砂千子先生の「何事も面白がって生きよう。失敗も歌材と思えば染しいはず」のお姿に感銘を受けました。ご指導を受けるうちに、ひとつの言葉からふうっとおりのように過去の断片が色濃く蘇るようになりました。

今、詠うことが楽しいです。そして川柳をよむ父は、そんな私のことをことのほか喜んでくれています。

◆今月の二人・吉田明子作品評◆

音羽の山の冠る大虹

吉田さんは、京都市在住。ペン習字のお手本のような原稿にまずほれほれし、歌の調べの良さにうっとり……。

・春風に押され心地の雨雲の隙間に入る山科の街

心地よい調べが一続きに結句まで。雨雲の隙間に入った山科の街は、そっだけ暗れているのだろうか。「春風に押され心地の」は「雨雲」にかかっているが、歌全体から作者の心持ちのようにも、序詞のようにも見えてくる。

・朝日射す音羽の山の芽ぐみくる彩も形も優しく増しつ

この歌も調べがいい、特に上の句。下の句、彩も形も優しく増したというのは木の芽のこと？「優しさ」が増したというのなら、芽吹き頃の山の雰囲気かと思うが。「増しつ」もちょっと気になった。自然にそうだったのなら「増しぬ」かな。

・気まぐれな春の嵐の置き土産 音羽の山の冠る大虹

この歌では、上の句と下の句をスパッと切って、思い切りの良いスケールの大きな景を描き出している。山が大虹を冠にしているなんて、音羽の山が俄然、雅な男のように思われる。

・贈られたるふたつの柿の朱ぬくく深しんの夜は人に逢いたし

初句「贈られたる」と字余りにしても丁寧に詠いだしたところがいい。柿の朱色がまた、人恋しさを誘うようである。

・吾のため友達り来しニゲラの種 花言葉佳き「不屈の精神」
調べは悪くなるかもしれないが、「友」の後にも「の」を入

れたい。ニゲラは南ヨーロッパ原産らしい。このところよく花壇でも見かけるようになった。種を送ってくれた友は、ニゲラの花言葉を知っていて励まそうとしてくれたのだろうか。

◆今月の二人・土井谷恭子作品評◆

学校は海にかこまるる

評者・久我田鶴子

広島県廿日市市在住の土井谷さん。新採用の地は、山口県の周防大島だったという。そこでの日々を今、蘇らせている。

・ブランクの後に決まりし学校は海にかこまるる周防大島

ブランクが何を指しているのかは分からない。この歌の前からすると、失恋後の時間なのか。とにかく、すんなりと決まったわけではない就職先(学校)だったようだ。

・新採用は地元に住めと校長は教員住宅をわにあたえき

校長の一声で周防大島の教員住宅に住むことになったことが感情抜きに、事実を述べる口調で歌にされている。

やがて一年が経ち、海に囲まれた島での生活にも慣れてきた頃のこととは次のような歌になっている。

・取りすぎた牡蛎とワカメを配りしは忘れられない春の大潮

口語と文語が交じっているが、「取りすぎた」も「忘れられない」も素直な気持ちだろう。春の大潮に喜び勇んで、牡蛎を取ったり、ワカメを取ったり、ついたくさん取りすぎて周囲の人たちに配ってまわった。そりゃあ、忘れられるはずがない。

・夏のみず冷たきことに驚きぬ海流速き伊保田の海は

伊保田は、周防大島の港。夏の水に触れてみて冷たいことに驚きつつ、海流が速いことに起因していることに気づいたというのだろう。瀬戸内海の西の端に位置する伊保田である。

・「大丈夫おまえは人に助けられる」結婚前夜の父のはなむけ

恋の終わりの歌から始まった一連は、結婚前夜の父のはなむけで閉じられる。父の「大丈夫」という言葉は、その後の人生の太鼓判、大きな支えとなったことだろう。

私が近藤芳仙先生のもとで短歌の勉強をはじめたから間もなく二十年になろうとしている、そんなタイミングで原稿の依頼を頂戴しました。「私と短歌との出会い」は二〇〇〇年四月、丸子町カルチャー教室の短歌講座に入門した時に廻ります。三十七歳、長男の嫁として義父母と同居するようになって三年目、幼稚園児ふたりを育て、遠距離通勤の夫を支える妻としてストレス多きころでした。

義父母の親友、塚田宏先生と奥様の禮子さんご夫婦が我が家を訪ねて来られた時に、短歌は経済的な趣味でいくつになってもできること、歌を詠もうと思う暮らしには発見があり人生をより深く考えながら過ごせること、お仲間との歌会がとても勉強になること、を禮子さんが楽しそうに語られました。義母を短歌に誘うつもりだったかと思いますが、素敵なご夫婦の秘訣を垣間見たようで、影響を受けたのは私の方でした。早速申し込んだカルチャー教室の月一回の短歌講座が待ち遠しい思いでした。

三十一音をリズムにのせて口語で表現する短歌の歌詠みは、子育て真最中の私にとっては題材に事欠きませんでした。幼稚園児の息子たちの可愛らしさをどのように歌に詠もうかと工夫するのが楽しく、歌会で添削していただくのと短歌らしくなる自

分の歌をかなり気に入っていました。短歌を勉強しようというより新しい趣味を楽しむ三年間はあっという間に過ぎ、地中海への入会に至りました。

二〇〇三年四月、地中海信濃支社に入会し、塚田禮子さんにご挨拶できた時は本当に嬉しかったです。今では「真弓さんの歌を毎号必ず読んでいますよ」と言っていた



だき、嬉しいやら恥ずかしいやらですが、月刊「地中海」への短歌の提出は、毎月の締切に追われピンチの連続です。

これまで「地中海」への原稿のほか、以下の合同歌集に掲載させていただきました。
 (一)平成二十年『知具麻―第二集』題「育児」、
 (二)平成二十五年『さざれ石の会―第一集』
 題「生長と別れと」、(三)平成三十年『さざ

れ石の会―第二集』題「半分生きて」。立派な装丁の合同歌集のページをめくると、その時の自分やお仲間の方々がにわかにな貴な歌詠み人に見える不思議。短歌を継続してゆこうと勇気がわいてきます。

地中海全国大会は来年(令和二年)第68回大会を迎えますが、私が初めて全国大会に参加したのは「第54回信州軽井沢大会」でした。大会委員長が近藤芳仙先生。

信濃支社はホストとして運営を一手に引き受け、私は若さを發揮してお手伝いに奔走しました。おもてなしのサブライズに群読を猛練習し、「からまつ」「小諸なる古城のほとり」の披露を終えて拍手をいただいた時はほっとしました。軽井沢プリンスホテルを会場に一泊二日、全国大会開催に携わる貴重な経験になりました。

二十年を二十歳と考えれば成人式を祝う大きな節目。私の短歌のそれは今年四月。ワインで乾杯しましょうか。

「折り返しを生きる」わが人生：五十歳で富士山登山ご来光に万歳を、五十五歳でホノルルマラソンを完走しガッツポーズを、その時の想いを歌に詠むことが出来ました。六十歳、七十歳：と節目ごとに何かを成し遂げ、ちゃっかりと自慢を歌に詠めるようなら幸せです。これからもお仲間と楽しく、作歌に励んでまいります。